

学級の規模別の長所・短所

南房総市に勤める先生方に、学級規模ごとの長所・短所を伺いました。

① 市内の一般的な規模（20～30 人/クラス）

（●子どもにとって・◆先生にとって）

長 所

- 苦手な子がいても、それなりにうまく過ごす術を身に着けていく。
- 1つの目標に向かって、大勢で何かを達成した時の喜びが大きい。
- 話し合いが盛り上がると活性化する。
- 体育科等、チームでやる活動が盛り上がる。
- ◆子どもたちが多様な意見が出せるようになってくると、授業がおもしろい。
- ◆大掃除等、子どもたちと一気にきれいにすることができる。
- ◆行事の盛り上がりが大きい。

短 所

- 発言力のある子だけが目立ってしまい、反対意見を言いにくい。
- 授業中「わからない」と言いにくいかもしれない。
- さわがしくなると、そのうるささに耐えられない子もいる。
- グループで何かをするときに、何もしないで終わってしまう子がでてくる。
- ◆校外学習等、人数把握に時間がかかる。
- ◆事務処理（宿題点検、テスト等の○付け、ノートの点検、成績処理等）の時間がかかる。

- ◆授業において様々な考えが出ることで深めることができる。
- ◆この程度の人数であれば、一人一人の様子を把握できる。
- ◆どのような活動や授業も、制限なく（人数が少ないから…等）行うことができる。
- 友達関係が固定されにくい。
- 大人数で行う活動や授業も行うことができ、楽しさや充実感を味わうことができる。
- 様々な考えに触れることができる。

- ◆子供一人一人との濃度が薄くなる。
- ◆事務仕事が増える。
- 教師との距離を感じる子もいるのでは？
- 発言が苦手な子は授業中に発言しなくても授業が進む。
- 少人数のクラスと比較して、活躍の場が減る。

- 児童・生徒は、クラス内で様々なグループに所属できるため、極少人数時のような児童・生徒の関係性が固定化しにくい。
- クラス内で日常的に多様な友人と接することで、視野が広がるとともに、コミュニケーション能力が高まる。また、寛容な心が育まれる。

- ◆20～30 人程度であっても、クラス内の児童・生徒が増えれば、必然的に一人一人にかけられる教師のエネルギーは減少する。その少しの減少に影響を受ける児童・生徒はある程度は存在する。教師が、児童・生徒の辛さや苦しさに気づきにくくなることが問題である。
- ◆学力差への対応が難しくなり、児童・生徒個々にとって必要な指導や助言がしにくくなる。結果として、児童・生徒個々の最適な学びが実現しにくくなる。

- 子どもたち同士の関係が良い意味でシャッフルできる。(席替え、班替え、係替え)
- 子どもたちがリーダー、フォロワーなどいろいろな立場、役割を経験できる。
- ◆班やグループで競争するなど、切磋琢磨する環境を整えやすい。

- ◆10 人程度の学級と比べて、担任の事務量が多くなる。(テスト・ワークの採点、通知表、保護者との面接など)

- ◆教師の目が届きやすいため、個々の児童生徒の実態に応じたきめ細かな指導・支援ができる規模である。
- ◆グループ活動やペア学習、一斉学習など、学習形態をねらいに応じて柔軟に変えることができる規模である。
- ◆児童生徒に係る書類作成や成績評価、面談や家庭訪問等、件数が少ないため担当教師にとって対応しやすい規模である。
- ◆児童生徒の活躍の機会について、教師がある程度コントロールできる。

- 人間関係が固定化されやすい。この規模で学年に2 クラスあれば別だが。考えや意見のぶつかり合う機会も少なく、生徒会活動や授業、学級会等が盛り上がらない。人数の多い学級に比べ、子ども同士の磨き合いの機会が少ない。
- ◆学年1 クラスでこの規模だと、行事等の持ち方に工夫が必要である。(運動会などでは、20 人を二つに分けるなど)
- ◆教員定数の割り振りが少ない。教員が少ないため、相互研修による磨き合いの機会も減る。

●◆教員も友達もそれぞれの性質を理解しやすいため、各自の特性を受け入れながら学校生活を送ることが実現しやすい。

●◆すべての子どもをすべての教員で面倒見るような雰囲気をつくれる。

◆学級の事務処理は、通常の負担。

●◆教員も友達も各自の特性を受け入れながらの学校生活が実現しやすいが、相互に向上しようとする雰囲気が薄い傾向がある。

●クラス替えがない場合、集団の中の人間関係や個々の立ち位置が固定化しがちになる。

⇒競い合いや自分もできるようになろうとする相互作用が弱い傾向があり、自分はこのあたりだとあきらめる雰囲気が強くなる（自己肯定感▲達成感▲）

●◆単学級の学年は、教員も子どもも、隣のクラスと比較して自分の学級を客観視する機会に恵まれない。

◆学級に関わる事務処理は通常だが、学年単学級の場合に若手にとっては見本や相談できる教員が隣にいない。

●いろんな意見や考え方がでる。比較・検証できる環境がある。

●クラス替え、グループ替えでいろんなタイプの子と関われる。人間関係作りに必要。

●クラス替え、グループ替えを契機にして意欲付けできる。

●自分と同じ趣味や嗜好の仲間を見つけることができる。

●優秀な子、得意な子にスポットが当たりがち。やりたいけど手助けが必要な子、ズルしてやりたくない子への指導が必要。

◆20～25人程度のクラスが一番運営しやすい。

◆適度な人数で、行事も学習もフォローしながらも活気がでる。

●友人関係のグループが複数つくれる。

●友人関係が合わない場合でも他グループに入れる可能性がある。

◆短所は特に感じない。

◆特性の強い子たちが複数いた場合は運営が大変。

●小学校や中学校に進学時に複数の園や学校から子どもたちが入ってこない場合は、長い期間子どもたちの人間関係に変化がない。

- クラスの中で複数のグループができ、人間関係の流動性が生まれる。
- ◆4～5人で組むと、5～6グループできる。話し合いを組織しやすくなる。

【複数学級なら】

- ◆経験のある教員と若手が組む学年の人事が可能となる。教員の育成と学級の安定が図れ、学校にとって理想的な形であると考ええる。
- ◆小学校高学年であれば、授業を交換し、部分的な教科担任制を行うことが可能となる。教材研究の深まり、仕事の効率化が期待できる。
- 体育祭や合唱コンクールでは、クラス間での競争が可能となる。切磋琢磨することが期待できる。

② 極少人数（10人程度/クラス）（●子どもにとって・◆先生にとって）

長 所

- 学級で子どもが自分の居場所が当たり前のようにある。小さい時から一緒にいること、そこにいることが当然の関係性。
- ◆担任の事務量が少ない。（テスト・ワークの採点、通知表、保護者との面接など）

短 所

- 子ども同士の関係性が固定化される。（リーダーが変わらないなど）
- ◆子どもたち同士の関係、担任と子どもたちとの関係、ともに一度くずれると修復が困難。
- 高校に進学したり、就職したりして、人数が多い社会に出た際に、自分の存在感の薄さに悩む子が多い。

- ◆教員が児童生徒の学習状況、理解度、生活の変化に気づきやすい。
- 発言機会が増え、大勢の前では緊張してしまう子も手を挙げやすくなる。
- ◆教員が子どもとの信頼関係を築く時間を確保しやすく、落ち着いた学習環境が維持されやすい。

- 人間関係が限られてしまい、特定の友達とだけ付き合う、あるいはトラブルが起きた際に逃げ場がなくなる可能性がある。また、役割が固定化されやすい。
- 幅広い意見に触れて切磋琢磨する機会が少ない。

- ◆教師の目が届きやすいため、個々の児童生徒の実態に応じたきめ細かな指導・支援ができること。
- ◆児童生徒に係る書類作成や成績評価、面談や家庭訪問等、件数が少ないため担当教師にとって管理がしやすく負担が少ない。
- 行事や学習の場面で、活躍の機会が多い。

- 考えや意見のぶつかり合いが少ないため、授業や学級会が盛り上がらない。子ども同士の磨き合いに欠ける。
- 人間関係が固定化され、社会性の育成に限界がある。
- 一部の仲間関係に支障を来すと、集団全体に影響が出やすく、修復にも時間がかかる。
- 学校行事のスケールが小さくなってしまいう。
例：運動会のレース数・応援合戦の迫力など
- ◆教員定数の割り振りが少ない。教員が少ないため、相互研修による磨き合いの機会も減る。

- 体育の活動や理科の実験など、順番が早く回り活動量が多くなる。
- 6年生になると、多くの子が全校のリーダーを経験できる。
- お互いずっと知っている関係なので、あまり多くのことを語らずとも関係が作れる。
- 消極的な子やざわざわした環境が苦手な子にとっては、安心できる。
- ◆校外学習等、安全管理がしやすい。
- ◆事務処理（宿題点検、テスト等の○付け、ノートの点検、成績処理等）の時間が短い。
- ◆算数等、個別の指導が多く必要な場合、目も手もかけられる。
- ◆事務処理の時間が短い分、教材研究の時間がとれる。

- 合わない子がいると接触する機会（同じグループになる等）が多くなり、嫌な思いをすることがある。
- 中学校で大人数になった場合、ギャップを感じて変化に対応できなくなる子がでてくるかもしれない。
- 大人数の中での発表に慣れていない。
- クラスの中で、個々のイメージが固定化されやすい。
- 多様な意見が出にくい。1つの意見に流れやすい。
- 体育科のゲーム系（バレーやリレー等）のチーム数が少なくなる。
- 少ない人数で校内を掃除する必要がある。
- 過去にもめ事があった子同士の人間関係を崩しにくい。嫌な思いをひきずっていることが多いため。
- ◆教員数も少ないと思われるので、1人の校務分掌が多くなる。

- ◆子どもたち一人ひとりに目が行き届く。
- ◆日々のコミュニケーションをひとりひとりとしっかりとれる。
- ◆学習の習熟度合いも把握できる。
- ◆トラブルも未然に防ぐことができる。
- 先生とコミュニケーションがとりやすい。
- 学習のフォローをしてもらう機会が増える。

- ◆目が届きすぎてしまうので、子ども同士で折り合いをつけて解決する場面等を経験させることができないかもしれない。
- 友人関係が濃くなりすぎる。
- 大きなトラブルがあった場合に他の友人関係を構築することが難しい。

- ◆教師の児童・生徒への適切な指導・助言により、児童・生徒個々の個別最適な学びが実現しやすくなる。
- 児童・生徒一人一人が表現する機会が増えることで表現の向上が期待できる。

- 困ったときなど、すぐに教師に助けを求めることができるため、自分の力で何とかしようとする意欲が低下する。
- 児童・生徒の関係性が固定化しやすく、万が一、負の関係性が生じた場合その改善が難しい。

- よく見てもらえる。
- 比較するとアットホームな雰囲気です安心して授業を受けることができる。
- 活躍の場が増える。
- ◆目が行き届く。
- ◆一人一人をよく見ることができる。
- ◆家庭との連絡も密にできる。

- 立場・友達関係が固定されてしまう。
- 学びが深まりにくい。
- 大人数で行う楽しさや達成感、充実感を味わうことができない。(団体競技、合唱、合奏等)
- ◆授業等で様々な意見が出にくい。授業の深まりが弱くなる。

- ずっと同じ仲間なので仲が良い（大きなもめ事にならない→大きなもめ事になるとその後がやりにくくなるからさせないところが親も子も見られる）
- 行事では一人一役以上が割り振られるため、個にスポットライトが当たる。
- ◆教員は、子どもの状況（家庭や学習の進み具合等）が把握しやすい。丸つけや成績表の処理とすぐに終わる。（だからといって指導が楽なわけでない）

- 男女の偏りが生じやすい（過去、女子一人での入学が見込まれ、別の学校へ入学することにした家庭があった）
- 修学旅行等の費用が割高になることがある（貸し切りバスを人数割り、卒業アルバム代など）
- 班活動やグループ分けがむずかしい。係など一人の負担大。
- ◆子どもも教員も、「○○さんはこういう子」というラベルや上下がつくと変わりづらい。
- 能力差の大きいクラスだと、一人の意見に良くも悪くも引っ張られる。多様な意見等が出てこず深まりがない。

- ◆教員も友達もそれぞれの性質を理解しやすいため、各自の特性を受け入れながら学校生活を送ることが実現しやすい。
- ◆学級の事務処理は、人数相応に減るが。

- ◆教員も友達も各自の特性を受け入れながらの学校生活が実現しやすいが、相互に向上しようとする雰囲気薄い傾向がある。
- クラス替えがない場合、集団の中の人間関係や個々の立ち位置が固定化しがちになる。
⇒競い合いや自分もできるようになろうとする相互作用が弱い傾向があり、自分はこのあたりだとあきらめる雰囲気が強くなる（自己肯定感▲達成感▲）
- ◆単学級の学年は、教員も子どもも、隣のクラスと比較して自分の学級を客観視する機会に恵まれない。
- ◆多様な形態での学び合いに限界がある。
2人×5班、5人×2班、3人×3班など
行事等での比較的大きな集団の編成が限定的
- ◆学級に関わる事務処理は人数相応に減少するが、学年単学級の場合に若手にとっては見本や相談できる教員が隣にいない。
- ◆学級の事務処理は減少するが、学校全体の分掌は小規模校でも同様の分担があるため、教員の配置数が減少すれば一人の教員が複数の分掌を受け持つことになり、教員の負担は増えることになる。教科によっては、複数学年の授業を担当することや免許外の教科を指導する教員が出現する。⇒授業研究、成績処理、テスト作成

③ 複式学級（2 学年で 16 人以下/クラス）（●子どもにとって・◆先生にとって）

長 所

- 年上の子が年下の子に教えたり、手伝ったりする場面が日常的にあり、人間関係の幅を広げることにつながる。
- 「直接指導しているグループ」と「自習に取り組んでいるグループ」に分かれて学習する。自分で考え、進める力が養われる。
- ◆一人一人の習熟度や性格をより把握でき、きめ細かな声かけにつながる。

短 所

- ◆2 学年分の学習内容を理解し、それぞれに適した教材や授業展開を同時に組み立てる必要がある。教員の準備負担が大きくなる。
- 同級生が少ないため、競い合ったり、多様な意見に触れて議論を深めたりする経験が不足する。

- ◆異学年での交流ができる。
- 年長者、年少者が一緒に活動するので、友人関係のクッションがありそう。

- ◆教材研究が複数学年に及ぶため、準備の時間が増える。
- ◆いわゆる授業という形式のものになりにくい。※異学年が一緒に学ぶので。
- 授業自体の形態が一斉授業形式なりにくい。
- 進学したときのギャップが大きそう。

- ◆教師の目が届きやすいため、個々の児童生徒の実態に応じたきめ細かな指導・支援ができる。
- 異学年が同じ教室で学ぶため、横だけでなく縦の関係を利用して学ばせることもできる。

- ◆教師の力量によるところが大きい。さらに教師の数が少なく、学校として展開できる教育活動に限度がある。教師同士の磨き合いや勉強の機会が少ない。
- 社会性が育ちにくい。中学や高校など、大集団規模の上級学校に進学したときに、集団不適応を起こしやすい傾向がある。

●違う学年の子ともうまくやる力がつく。

- 中学校で大人数になった場合のギャップを感じることもある。
- 体育科のゲーム系（バレーやリレー等）のチーム数が少なくなる。
- 少ない人数で校内を掃除する必要がある。
- ◆異なる学年と一緒に見るには、学級経営も授業も労力がいる。
- ◆教員数も少ないと思われるので、1人の校務分掌が多くなる。

- ◆生活面においては目が行き届く。
- ◆家庭との連絡も密にできる。
- 他学年の児童と生活することで、下の子は次学年の見通しを持つことができる。上の学年の子は面倒を見るなどのつながりができる。

- ◆2学年分の授業準備、教材研究が必要。
- ◆1時間の授業で2学年の学習をみることはとても大変である。
- ◆学年によって心身の成長が異なるため指導が難しい。（目標も）
- 授業によっては1時間の中で自習のような時間ができてしまうことが多いのでは？
- 友達関係やクラスでの立場が固定されてしまう。

- 異学年や学校全体で仲が良い。
- ◆地域や保護者の協力が大きい。
- 教員のきめ細やかな関わりができる（教員によっては過保護？進学先のほっとかれ具合【普通レベル】にショックを受けること有り）

- 球技や合奏合唱のような集団学習に制約あり。
- ◆教員の教材研究・指導準備の負担大。同じ事をやっても、子どもの一年の差は大きい。それぞれの指導が必要。
- ◆学校経営上、一人の教員の負担大。校務分掌をいくつも兼ねることになり、授業準備の時間がなくなる。
- 人間関係が固定化。合う子・合わない子がはっきりしてどちらも我慢。

- ◆教員も友達もそれぞれの性質を理解しやすいため、各自の特性を受け入れながら学校生活を送ることが実現しやすい。
- ◆すべての子どもをすべての教員で面倒見のような雰囲気をつくれる。
- ◆学級の事務処理は、人数相応に減る。

- ◆教員も友達も各自の特性を受け入れながらの学校生活が実現しやすいが、相互に向上しようとする雰囲気が薄い傾向がある。
- 同一学年での競い合いや自分もできるようになろうとする相互作用が弱い傾向がある。(自己肯定感▲達成感▲)
- ◆隣のクラスと比較して自分や自分のクラスを客観視することが難しい。
- 異学年が同じ空間で学ぶため、多様な形態での学び合いに限界がある。
- ◆行事等での比較的大きな集団の編成がより限定的
- ◆学級に関わる事務処理は人数相応に減少するが、異年齢の同時指導は難しさがある。
- ◆学級の事務処理は減少するが、学校全体の分掌は小規模校でも同様の分担があるため教員の配置数が減少すれば一人の教員が複数の分掌を受け持つことになり教員の負担は増えることになる。複数学年の授業のほか、免許外教科の指導を担当する教員が増える。⇒授業研究、成績処理、テスト作成